

教育の森
— Kyoiku no mori —

悲しみ胸に前へ進む

東日本大震災 10年

「あの日に学ぶ」
「あした」を守る
社会・上

今年3月で東日本大震災の発生から丸10年となります。今、小中学校で学んでいる児童・生徒の皆さんは、震災の時にまだ生まれていなかったか、幼い時の出来事であり記憶がない人がほとんどでしょう。東日本大震災ってどんな災害だったの？ 東日本大震災の悲しみは続いているの？

津波が残した傷

東日本大震災は2011年、小中学校の学年末が近く3月11日に起きました。発令時刻は、下校時刻前後にあたる午後2時46分。激しい揺れの後、がれきを巻き込んだ真黒い津波が東北沿岸などを襲いました。津波は高いところでもビル10階以上に匹敵する40メートルに達し、街をまるごと飲み込みました。家も、木々などは流され、多くの人が溺れて亡くなったのです。津波で命を失ったケースのみならず、震災後、避難中に体調を崩す「関連死」も発生しました。津波が海に流さ



イラスト：にじむらえ



①昨年末の宮城県石巻市南浜・門脇地区。石巻南浜津波復興祈念公園などの整備が進められている。一和田大典撮影 ②震災直後の同地区—2011年3月21日午前8時57分、森田剛史撮影

東日本大震災の死者・行方不明者数	
岩手県	死者 4675人 行方不明 1111人 関連死 469人
宮城県	死者 9543人 行方不明 1216人 関連死 928人
福島県	死者 1614人 行方不明 196人 関連死 2286人
計	死者 1万5899人 行方不明 2527人 関連死 3739人

※警察庁発表(2020年12月10日現在)
関連死は復興庁発表(19年9月10日現在)

他の自治体の死者・行方不明	
茨城 25人	青森・栃木・神奈川 各4人
千葉 23人	北海道・群馬 各1人
東京 7人	
山形 2人	

るなどして今も見つかっていない「行方不明者」も合わせると、震災の犠牲者は全国で2万2000人以上に達します。国の統計によると、震災で亡くなった子どもは少なくとも2009歳は4666人、10歳未満は499人いました。全国有数のサンマの水揚げで有

家族の捜索今も

「行方不明者」は多く津波によって海や川に流されてしまったとみられます。水底に沈んだがれきの下になり、見つからない遺体があるかもしれません。東日本大震災レベルの大きな地震でも、例えば1995年に起きた阪神大震災は津波被害がなかったため、今回のように多くの行方不明者が発生したということはありません。

津波で亡くなった人の中には、居住地から遠く離れた場所で見つかったケースもあります。何度も押し寄せては引く津波で運ばれたと考えられます。一方で家族や友人など大切な人の遺体が見つからない被災地の人たちは、一つの区切りを付けるため、役所に「死亡届」を出して遺体のないお葬式を行いました。

そのような被災者も、「骨でも体の一部でもいいから見つけてほしい」と希望を持ち残っています。近年でも、行方不明者の唾液

が付着した切手から検出されたDNA型を鑑定したところ、誰のものか分らなかった骨の身元が判明した▽海で漁の船にかかった骨を警察に届け出た後、両親が帰りを待ちわびていた一人娘のことが確認された▽ケースがあるのだ。

一方、震災から10年近くたった今も、行方不明の家族を捜し続けている人がいます。宮城県石巻市立大川小学校では、児童108人のうち70人が行方不明、4人が行方不明のままです。被災地の学校現場としては最も大きな被害でした。2年たった長男の行方が分からぬ(男性5)、震災直後に亡くなった約束を胸にトラック運転手の仕事を辞め、重機を自分で動かして学校周辺の土を掘って捜していた(女性2)も、4年たった長女(女性)を捜す鈴木美穂さん(52)も「見つめてあげられなくてごめんね」と心の中で謝りながら、寒さの下でも足元を凍らせたままです。

復興とは何か

震災後、国は被災地の「復興」を掲げて街づくりに取り組みしてきました。被災者用の復興住宅が完成し、大規模な防潮堤ができました。しかし、取り戻せなくなった景色もあります。大川小のある大川地区は北上川の河口に近く、大きな力も取れる自然豊かな土地です。しかし震災後、広範囲が津波の危険性のある災害危険区域に指定され、多くの人が離れざるを得ませんでした。

また、震災後に高台での再建を目指した大川小も、子どもの数が減少したことから018年で閉校してしましました。「学校も子どももなくなれば、地域は消えてしまう」と嘆くお年寄りもいます。震災後、海辺から内陸に引っ越し

た家庭は少なくありません。元々、高齢化や過疎化が懸念されていた地域で、震災がそのスピードを速めてしまいました。若い世代がいなくなると、地域の伝統行事が途絶えてしまいかねません。福島第一原子力発電所の爆発事故で避難指示が出た地域では、町並みは残っているのに、たきかぶりなどに悪い影響を与える放射線の値が高く、帰ることができない場所が今もあります。国や政治家は「復興」という言葉をよく使います。しかし、ある被災地の若者は「復興したか?」か「どういった外から見た物差し(すざない)とごまかす。この若者は、かつての震災日報を少しでも多くの人に伝え、震災を語り継ぎたいそうです。真の復興とは一体、何でしょうか。被災地の心に耳を傾け考えをめぐらした。

普通に暮らしながら備えを 作家・池澤夏樹さん



山口城津部撮影

とみる。そうして災害とは具体的にどういふものか、身をもって考える。先生や教育行政の人たちには、児童と教職員84人が亡くなった大川小に足を運んでほしい。事前の備えを怠ることはもちろん、現場で判断するリスクを恐れる教育システムであってはならず、自分たちに置き換え、想像してほしいのです。

自然の中で生きていければ、災害は必ず来ます。天災は避けられないが、人災はなくせる。震災の教訓を全部生かして備えることが、未来に対する義務です。

歴史を見れば、日本はヨーロッパのように外国から攻められることはあまりないが、自然災害が多い。そうした島国としての歴史認識を持つていた方がいい。それが私たちの生きざる条件で、それを踏まえ未来図を描かなければならない。遠くを見る望遠レンズと、近くを見渡す広角レンズの両方が必要だ。

大規模な災害が増え、私たちに自然の脅威を「思い出せ」と言ってくれている気がします。その声にどう応じるか、伝えたいのは「備えて、忘れてください」ということ。災害という感覚を学んだはず。最悪を想定しても、それを超えるものがある。そうした覚悟というか、認識を持っていかねばいけません。(談)

いけざわ・なつき 1945年北海道生まれ。88年に芥川賞。「春を恨んだりはない 震災をめぐる考えたこと」や、震災が題材の小説「双頭の船」などの著作がある。

震災から、もうすぐ10年ですね。被災者はそれぞれ傷を負い、時間とともに癒えるとはいえないけれど、直撃の痛みはなくなっていき、亡くなった人を何度も思い返すことで、自分たちを慰めながら生きてきたように思います。被災地によく通いました。現地ですべて友人たちは生活が安定した人もいれば、交流するうちに亡くなった人もいます。それが歳月というものです。では、この10年弱で社会は変わったのでしょうか。

震災で、私たちは生活の土台というものが実は不安定なものだと知り知らされました。今の新型コロナウイルスも同じ。「足をすくわれる」という感覚を学んだはず。最悪を想定しても、それを超えるものがある。そうした覚悟というか、認識を持っていかねばいけません。

震災の記憶がない若い皆さんには、被災地への修学旅行を提案しています。例えば、津波にのまれた仙台空港から宮城に入り、多くの人命が救われた仙台市内の震災遺構・荒浜小で、屋上まで走る避難訓練をし